

◇N. N. Law (ed.): *Sphutartha Abhitharmakośa-vyakhyā of Yaśomitra (I-III)*.

Culcutta 1949, 45+103+191+111p.

Culcutta Oriental Series の第三一

輯として刊行された俱舍論釋友釋の第一根品から第三世間品までのテキストで、デーブナーガリー書體によつてゐる。巻頭に四十五頁に互る序論を附し、その中で俱舍論前三品の所説の内容を摘要紹介してゐる。

一、校訂に用ひられたマニユスクリプトと参照された既刊本

- (1) 一日本人學者のなした筆寫本の ferro-copy (これは笠原・南條寫本を泉教授が青寫眞にしたものを指すのではないか)
- (2) ベンガル・アジャ協會の寫本
- (3) ケンブリジ寫本のロートグラフ
- (4) 萩原校訂本
- (5) 佛敎文庫本(界・銀品)
- (6) (世間品)フサン校訂本

校訂者によれば、(1)(2)は粗雑なマニユスクリプト、(3)は稀に見る良本、(4)はすぐれた校訂本で自分がより良い読み方をし得た箇所は僅かである、といふ。萩原本の校訂はカルカッタ寫本(C)及び笠原・南條筆寫のバリ國民圖書館本(N)を用ひ(5)(6)を参照してゐる。この本の用ひた(1)は萩原本の(N)ではないかと思はれるが、(N)ならば良い寫本の管で、校訂者の言ふところと相應しない。

校訂者は、校訂本文の脚註に校異を出してゐるが、それにはA、B、T、(To)、V、C、Uなどの略號を用ひてをり、それがそれぞれ何に當るかは示してゐない。萩原本と比較して見ると、T或はToといふのは萩原本らしく、Bといふのは佛敎文庫本らしく思はれる。その他はよくわからない。

二、本頌の本文 このテキストでは、俱舍論本頌の本文を、全文、一偈ごとまとめて、それぞれその偈の收めらるべき一節のはじめに、括弧で圍んで出している。釋友釋の中に本頌の全文が含まれてゐるのではないから、この本頌は別のマニユスクリプトが刊本から引用してゐるに違ひないが、その依用した本が何かでない。界品では殆ど完全にゴーカーレ本に一致するが、根品では第一偈はゴーカーレ本に合し、第二・三・四・五・六・九偈などはフサン復元梵文に合致する。かと思へば、第一一偈はゴーカーレ本の方に合し、第一四偈は二本のどれとも異るといつた風である。したがつて、これは恐らく未校刊の別な一種のマニユスクリプトに依つてゐるのであらう。

三、釋友釋の本文 萩原本に比してよいとは決していへない。萩原本をより正しい形に修正してゐる點も全くないのでない(例へば、萩原本四一頁第三行の *samāsatas tu jhātavya* は俱舍論本文ではあるが本頌ではない。此の本の界品四六頁一七行の如くすべきである。また萩原本二六四頁二二行の *vinānan na siliti; proktan* は本頌であるから、此の本の世間品一四頁二四行の如くすべきである)けれども、萩原本の方がより良い箇所の方が遙かに多い。殊に當然俱舍本論の引用とすべき箇所(斯の本ではこれを太字で示してゐる)をさうしてゐない場合が甚だ多い。校訂者はその校訂に

際してはチベット譯俱舍論を参照したやうに述べてゐるが、このやうに誤りが多いのを見ると、その仕方は全く嚴密でないと言はねばならない。

四、所論の摘要　校訂者がその序論の中に與へてゐる俱舍論前三品の所説の摘要解説は、甚だしく誤りが多い。俱舍論のほんの初歩を知る者すらも冒さないであらうと思はれるやうな誤謬が幾つも見出され、校訂者は果して有部教義についてどの程度の理解をもつてゐるかとは疑はしめる程である。ごく甚だしい例をいくつか挙げて見れば、色蘊(rupa-skandha)は五根・五境の外に五識と五つの(?)無表と意と法と意識とを含むとなし(六頁)、十八界中前十五界は有漏無漏に通じ意・法・意識界は唯有漏であるとし(一頁)、意根の對境は諸根諸境をも含めた一切法であるとし(二〇頁)、或ひは、無色界は五趣に含まれないとする(三五頁)。このやうな誤まりは、たとへば譯或ひはチベット譯の俱舍論本論を讀まなくとも、いまこのテキストに含まれてゐる俱舍論本頌と稱友釋の梵文を注意深く讀めば、決しておちいる筈がないと思は

れるのであつて、本文校訂者によつてこのやうな解説がなされてゐるのにむしろ奇異の感をいだかないではゐられない。

◇ 世親唯識の研究 上

結城 令聞著

(櫻部)

本書は、唯識思想の源流を探つて發表された會つての著者の勞作「リ見たる心意識論」唯識思想史」に續き、完成期の唯識學説の研究としてまとめられたものである。本書の構成は、資料論、歴史論、思想論の三部より成るが、ここに紹介する上巻は、資料論と歴史論とであり、下巻の思想論は未刊である。

第一部の資料論は、世親の唯識思想研究に關する必要な諸文獻の中、資料的に異論のある文獻についての吟味であつてここで著者は、(1)大乘莊嚴經論・顯揚聖教論・大乘百法明門論の撰述に關する異説を批判し、(2)眞諦三藏の翻譯にかかる轉識論、顯識論、三無性論の三部に對する字井博士等の從來の資料論へ再吟味を加へている。この中、轉識論を唯識三十頌の類本にして同本異譯にあらずとする

所説が、特に注目される。

第二部の歴史論は、世親の思想史的特殊の立場が、世親の論書に於いて、如何にしてなしとげられたかの歴史的考察を課題とした研究である。ここで、著者はまず、世親の思想的な特殊の立場が無著によつて大成された唯識學説を繼承しつつこれを簡單にし、その思想を全般的に整備統一し、さらに、反唯識思想を論破して唯識學説の地位を確保するといふ、唯識學説の完成者としての立場であるとするとする。そして著者は、大乘百法明門論が唯識學説の簡單化をあらわす論書であり、唯識三十頌が唯識學説を整備統一する論書であり、唯識二十論と大乘成業論とが反唯識思想を論破して唯識學説の地位を確保する論書であると見做し、これら四つの論書を源流となる歴史的な背景思想をさぐりつつ研究解釋し、これらの論書の上に世親唯識が如何にして形成されたかを客觀的に説明しようとして形成している。したがつて、先の資料論もさることながら、特にこの歴史論では、解深密經、瑜伽論、攝大乘論、俱舍論などの數多くの關係諸文獻をもつて考證する著者